

同士の社会的な組織もさらに崩壊を進めていくであらうことが予想される。

九十九里浜平野中部における土地の条件とその利用

仙波 朋子

九十九里浜平野は千葉県の東部に位置する広大な隆起海岸平野である。平野の全長は北の行部岬から南の太東崎までの約60km, その幅は西の両総(下総)台地末端の高さ30~50mの急崖麓から東の太平洋岸まで約8~10kmの距離を保っている。同平野内部には、海岸線と対してほぼ平行に、沿岸州が平野形成に伴い微高地(おおむね70cm前後)として出現した砂堆が断続的な列をなしており、その間には低湿地が発達して、モザイク状の地形分布がみられる。

こうした独特な土地の条件を反映して、九十九里浜平野中部、東金市および山武郡九十九里町付近では、産業立地あるいは土地利用分布等が海岸線に平行して北東-南西の方向に連続して配置するという一貫した利用状況が生じている。本研究では一定の方向に秩序づけられた利用の特色に着目し、その背景となる土地の条件とその利用の関係について考察を行った。

土地の条件は地域開拓の時期から反映された。対象地域には台地麓から海岸にかけてほぼ9個の集落が立地している。このうち両総台地麓に位置する1個を除いた残りの集落はすべて平野の砂堆上にあり、その成立経過は平野の地形特性に準ずる開発の難易度に沿っている。

さらに開拓期から対象地域には、地形によって区分された独自の土地利用パターンが発生・定着した。これは、排水の良好な砂堆上に宅地・畑地・林地等、排水の劣悪な低湿地には水田・湿地等が卓越するもので、土地利用分布は地形分布にほぼ一致している。また、同様の地形における土地の利用も、台地麓(あるいは海岸)からの距離によって土性が異なるために、栽培される農作物が

異なるといった微妙な差違を生じている。この土地利用パターンは戦後、土地改良等によって地形による土地利用の制約が希薄化していているために徐々に乱れつつある。殊に、単純かつ粗放的な利用の行われていた低湿地の利用性は向上し、宅地・畑地等の増加が見うけられる。この背景には減反政策、首都圏の通勤および住宅事情がかなりの影響力をもって存在している。このように、戦前まで強力に地域に定着していた土地利用パターンは変化していきつつあるが、現時点では決定的な乱れは生じておらず、むしろ従来の土地利用パターンが現在の利用を制約している様子もみられる。

また、地域の産業立地には内陸部と沿岸部で差違を生じており、内陸部には農業および工業(戦後高度成長期を中心に誘致されたもの)が、沿岸部には漁業、水産加工業、観光業が、それぞれさかんである。このうち農業と漁業は戦前における地域の主要産業で、殊に近世鱈漁は一大盛況を生んだ。戦前のこの地域では鱈漁の豊凶に沿って居住者の生活基盤が変化するという現象もみられている。戦後になって地域の産業構造は徐々に変化し、第1次産業から第2・第3次産業へとその中心が移行した。だが、戦前・戦後を通じ、地域の産業はその立地において一部に集中することがなく海岸線と平行しながら帯状に配置するという特色を持っている。

このように九十九里浜平野中部では土地の利用が平野の形状およびその地形分布に対応して行われており、同様の利用は海岸線と平行して連続的に配置するという傾向が見られる。また、一方、居住者の生活圏はこれを反映し、利用の連続する方向と直交する、すなわち台地麓と海岸線を結ぶ北西-南東の方向に強調されて広がっている。